

第10回日本放射光学会年会・ 放射光科学合同シンポジウム

組織委員長 安藤 正海 (高エネルギー物理学研究所)

御存知のように合同シンポになって3回目の大会であった。私にとっては学会の新ルールができた結果、学会執行部の任期が2年連続になったので、昨年(第9回)と今回の(第10回)の2つの大会にかかわることになった。ちなみに第9回は合同シンポになって2回目であった。第9回大会の折り、合同シンポを構成しているPFシンポの時間帯の割り振りに関して少々手こずった記憶がある。サイエンスセッションの時間が短いことが気がかりであった。

今回第10回の大方針の1つとしてサイエンスセッションを2日間とり、各施設単位のシンポジウムをこの2日間の中に入れなかった。前回大会終了後、1996年3月末日を期限に各シンポジウムが引き続き合同シンポジウムに参加する意思があるかどうかの回答を寄せてもらい、PFシンポジウムの出方を待ったことは記憶に新しい。この結果、まことに常識的な線に落ちついて、合同シンポは当分現在のような形で開催されることになったことでも意義深いものがある。PFのみが巨人である最後の大会でもあった。

さてここで組織委員長と組織委員会の任務をおさらいしておこう。

任務：1 組織委員会を立ち上げる。各施設または各利用者団体からの代表者各1名の推薦で発足した総勢10名であった。前回に各委員が2年連続組織委員であることを願ったところであるが、各施設・団体の中での担当委員のサイクルとの関連で入れ替えはやむなしというところである。会合は2回開かれた。

任務：2 実行委員会を立ち上げる。当番校としての東大から太田さんに委員長、神谷さんに副委員長を引き受けていただき文句無し。

任務：3 プログラム委員会を立ち上げる。都立大、羽生教授の指導のもとに19人の委員会が発足した。実質には太田実行委員長の方で人選が進み、組織委員長としてはプログラム委員の人選にあたって組織委員全員が入ることを希望し、受け入れられた結果、プログラム編成が円滑であったと総括している。

任務：4 財政面で大会を支援すること。各組織委員は各企業を担当し企業展示を呼びかけた。29社32小間の参加と出展を得て貢献できた。今回から賛助会員に対して出展料が20%割引になったことも記しておく。この割引は前回の展示企業からのアンケートをもとに反省し、当時、幹事会で衆議一決して採用された優遇措置である。これらの一連の立ち上げと企画が円滑に推移し、組織委員会としては仕事がなくなった。

任務：5 次回開催地を決めること。なかなか次回開催地が決まらなかった感があるが、最終的にはSPring-8が快諾してくださり、形式的には組織委員に手紙で承諾を求め、次期行事幹事へ申し送った。この時点で、組織委員会の仕事は100%終了した。

感想：放射光科学合同シンポジウムの組織委員長は立場上、放射光学会の行事幹事がお引き受けすることになっている。多くの行事を企画しようと思う場合には行事委員会の中で役割分担した方がよいと考えている。たとえば、副委員長が合同

シンポジウムを担当するという考えである。

謝辞：委員のみなさん、お役目ありがとうございます

いました。事務局もお疲れさまでした。ますますの放射光学会の発展を祈ります。

第10回日本放射光学会年会・ 放射光科学合同シンポジウム

実行委員長 太田 俊明 (東京大学)

第10回日本放射光学会年会、3回目の放射光施設の合同シンポジウムが平成9年1月8日から11日までの4日間、東京大学の安田講堂、山上会館、化学教室で開催された。これまで、高エネ研、分子研がホストとして合同シンポジウムを開催し、前回この方式を続行することが決まった。そして、今回、東京大学が計画している真空紫外軟X線高輝度放射光実験施設の推進母体である利用者懇談会がホスト役を引き受けることになった。

今回のシンポジウム開催にあたっては、最初に安藤正海組織委員長のもとで、実行委員会の編成、プログラム委員会の編成が行われた。そして、実行委員会は主として東京大学物性研と都内の放射光研究者で組織された。今回は特にプログラム委員会を独立に編成し、羽生隆昭(都立大理)委員長の下に18名の全国から選ばれた委員によって4回の会議がもたれ、プログラムの詳細が煮詰められた。一方、実行委員会の方は、1992年に放射光学会を同じ東京大学本郷キャンパスで行った経験から、大会場とたくさんのポスターの為のスペースをどのように確保するかで、神谷幸秀副委員長と共にキャンパス内を探し回った。結局、安田講堂と山上会館の部屋をできるだけ多く借り切り、パラレルに理学部化学教室の講堂、講義室を借りることでなんとかまかなうことにした。しかし、その後企業展示系の堀井さん(富士

通)ポスター会場系の辛さん、中井さんをはじめとする委員の苦労は大変であったと思う。

場所が東京都内と言うこともあり、ポスター一件数も200件を越え、企業展示も30件あり、スペースの関係で2件お断りしなければならない状態で、まさに嬉しい悲鳴であった。

1月8日からの学会期間は連日好天に恵まれ、600部印刷した予稿集も底をつくほどの盛況であった。1日目は各施設のユーザーズミーティングが開かれ、学会本番は2日目から始まった。午前中は安田講堂で企画1「放射光と中性子、中間子、陽電子との接点」が開かれた。フェトン・ファクトリーが4月より中性子、中間子、そして陽電子利用研究と一緒に新しく物質構造科学研究所としてスタートするが、この企画ではこれら他の粒子線が放射光と比較してどのような特徴があるかを明確にしようとするところに狙いがあり、それぞれの分野の第一人者に講演していただいた。特に印象的だったのは、野田氏(千葉大)の「これらの施設は全て相補的と言うよりも競合関係にあり、如何に技術革新をするか、そして、ユーザーフレンドリィな施設をつくるかが生き残るために重要だ」と力説されていたことである。

午後には3つの特別講演があった。最初は、筑波大学の杉下先生に「放射光による心血管造影法とその臨床応用」という演題で、これまでの高

エネ件・ARでの実験をお医者さんの立場から易しく解説していただいた。二番目は、東京大学の壽榮松先生にX線の物質科学への応用について話していただいた。先生のこれまで取り扱ってこられたフラーレン化合物の構造解析を中心に、放射光がどのように物質科学に有効に使われているかを多くの例を挙げながら説明された。そして、三番目は特別ゲストとしてアメリカLBNLのALS科学部門の責任者ネビル・スミス博士にご来日頂き、ALS軟X線高輝度光源を利用した研究の現状と将来展望について講演していただいた。ALSは稼働を始めて4年経つが、既に放射光の高輝度性を活用した様々なすばらしい実験成果を出されている。これらをきれいなOHPで紹介され、感銘を受けた。我が国でVUV・SX高輝度光源が利用できるのは早くとも4-5年先であることを考えると、追いつくのが大変だなというのが正直な感想である。

夜は放射光学会総会が開催され、その後、山上会館1階ホールで懇親会が坂井庶務幹事の司会のもとに開かれた。乾杯に先立って富家放射光学会前会長から今回初めての若手奨励賞の受賞者3名(田中隆次, 百生 敦, 萩谷健治氏)へ賞状と金一封が手渡された。そして、上坪新会長の乾杯の音頭で宴が始まった。通常、立食パーティではうっかり話に熱中していると食べるものがなくなるのが普通であるが、放射光学会の懇親会の料理は豪華で十分腹一杯食べられ、参加者も満足されたことと思う。これも企業展示に参加していただいた企業の篤い志のおかげであることをこの場を借りて感謝したい。

3日目からは会場を化学教室と山上会館だけにして、企画講演、口頭発表、そして、ポスターと盛りだくさんのプログラムが組まれていた。私は全てに顔を出すことは出来なかったが、いずれも熱気に包まれ、盛況であったように思う。特に、企画2「高輝度光源と利用研究」はSPring-8が今年からいよいよ稼働を始めること、東京大学の

高輝度光源の実現に近いこともあって、化学教室の講堂が満員で立ち見ができる盛況であった。

午後には企画3「高輝度光源の為の加速器とアンジュレーター」があり、現在ALSで活躍されている佐々木茂美さんにわざわざ帰国して頂き、佐々木アンジュレーターの講演をしていただいた。4日目の午前は「放射光による構造研究—ミクロから生体マクロ構造へ」という企画4が組まれていた。主として生物・蛋白質の構造解析やX線顕微鏡、位相型CTなど今後の発展が楽しみな応用分野の講演があった。

また、化学館講堂前のロビーに常設展示場を設け、既存の放射光実験施設の現状、改造計画、新しい施設建設の現状について紹介していただいたが、これをみると、少なくとも施設の数と計画の多さに関しては他国の追随を許さないであろう。

今回の合同シンポジウムの反省会はまだ開催していないので、独断と偏見になるが、会場に関してはあるものの、東京大学本郷キャンパスはこれ以上の規模の学会は難しく、特にポスター会場が限界であった。安田講堂は必ずしも学会用につくられていないので照明などに難があった。一方、利用分野が広過ぎてパラレルセッションを多くつくらなければならないこと、どうしても総花的にならざるを得ないこと、各施設のユーザー懇談会もパラレルになって両方に出席できないことなど、プログラム編成に難点はいくつかあった。しかし、3回目となって年会・合同シンポジウムのスタイルがほぼ定着してきたといえよう。発表件数も参加者数も前回よりかなり増加し、放射光化学がまだまだ成長しつつある学問分野であることを感じる。

次回は西播磨SPring-8で行われることが決まっているが、来年1月はSPring-8が稼働を始めてすぐの非常にタイミングの良いときである。今回の放射光学会合同シンポジウムがますます盛会になることを祈る。